

論文

日本の元号・歴史意識とキリスト教
Japanese Gengo, Historical Consciousness and Christianity

平山 朝治 (Asaji HIRAYAMA)
筑波大学人文社会系 教授

日本で途切れることなく定められるようになった最初の元号である大宝は首皇子（後の聖武天皇）誕生に因んだものと思われ、中国の建元が漢の武帝即位を基準とするのとは異なり、キリスト受肉紀元 AD の影響があるのではないかという仮説を立てて検証を試みる。

AD は641年には東シリア教会キリスト教とともに唐に伝わっており、久米邦武は聖徳太子伝にキリスト伝の影響があるとし、7世紀後半に唐からそれが伝わったと論じたが、根拠薄弱と批判されてきた。中国経由ではなく、インド人夫婦をはじめとするドヴァーラヴァティー（現在のタイ国チャオプラヤー川流域）の遣唐使節が654年日向に漂着し、彼らによってキリスト教が伝えられたことが、天智朝において製作されて流通した日本最初の鑄貨である帆銀貨（無文銀銭）や、インドから中国を経ずに朝鮮半島を経由して日本に渡来したとされる善光寺本尊如来によって裏付けられ、善光寺信仰のほか、祇園信仰、怨霊・御霊信仰や春秋彼岸会にもキリスト教の影響を読みとることができる。

日本に定着した不可逆的な歴史意識は終末を欠いており、ダーウィンの進化論との相性がよいことを丸山真男は指摘し、岡本太郎は70年万博の太陽の塔のなかに生命の樹としてそれを表現した。終末思想は周期化されて辛酉革命・甲子革命の思想に基づく改元慣行となった。後醍醐天皇や孝明天皇の在位中にそれらによる改元があつて討幕運動が高まり、1921辛酉年には原敬首相暗殺が起こり、その前後に大正デモクラシーが昂揚した。また、日本固有の進化論的歴史意識は高度経済成長後アイドルが担うようになった。

The Taiho era, which was the first era to be established without interruption in Japan, started from the birth of Prince Obito, who later became Emperor Shomu. This era is quite different from China's Kengen era, which was based on the enthronement of the Emperor Wu of Han. In this paper, we explore and test the hypothesis of the influence of the *anno domino* (AD) period after Christ's incarnation on Taiho.

AD was transmitted to Tang with East-Syriac Christianity in 641. Although Kunitake KUME points out that Christianity influenced Prince Shotoku's biography and that it was transmitted from Tang to Japan in the late 7th century, this argument has been criticized as unsound. An entourage which included an envoy of Dvaravati (the present-day Chao Phraya River area in Thailand) as well as Indian couples who intended to pay tribute to Tang came to Japan in 654 via a route that by-passed China. The fact that they also brought Christianity to Japan is supported by the production and circulation of the first Japanese coin (Bon Silver Coin), circulated in the Tenchi era. The principal image of Amida Sanzo-zo (the statue of Amida Triad) in Zenko-ji Temple (善光寺) is believed to have been sent to Japan from India via the Korean peninsula without passing through China. In addition to the Zenko-ji Faith, Christianity's influence can also be found in the Gion Faith (祇園信仰), the Spiritual Faith (怨霊・御霊信仰), and the Spring/Autumn Fair Party (春秋彼岸会) .

As pointed out by Masao MARUYAMA, the irreversible historical consciousness that has been established in Japan is unending and compatible with Darwin's theory of evolution. Taro OKAMOTO expresses it as the Tree of Life within the Tower of the Sun in the 1970 Exposition. Eschatological thought was transformed into cyclical patterns and was found in the practice of Kaigens based on the ideas of the Shin-yu Revolution (辛酉革命) and the Ko-shi change of order (甲子革命) . During the reigns of Emperor Godaigo and Emperor Komei, the Kaigens based on these ideas were performed and the abolition

movement against shogunate government（幕府）became dominant. Prime Minister Takashi (Kei) HARA was assassinated in 1921, and the Taisho democracy movement started to become dominant around that time. In addition, Japan's unique evolutionary historical consciousness has been expressed by idols after the period of high economic growth.

キーワード：大宝、首皇子、杣銀貨（無文銀銭）、善光寺、祇園、辛酉革命、進化論、アイドル

Keywords：Taiho, Prince Obito, Bon Silver Coin, Zenko-ji, Gion, Shin-yu Revolution, Theory of Evolution, Idol

はじめに

日本の元号は、大化改新に伴う皇極天皇の退位・孝徳天皇の即位の5日後、皇極天皇4年6月19日（ユリウス暦AD645年7月17日、以下西暦のADは省略）に大化元年と定められたのが初例であり、大化から白雉へと改元されたが、白雉5年10月10日（654年11月24日）の孝徳天皇崩御後は改元のないまま元号は使われず、天武天皇15年7月20日（686年8月14日）に朱鳥が定められたものの、朱鳥元年9月9日（10月1日）の同天皇崩御後、改元がなく元号は使われなかった。このように、7世紀後半の日本においては、中国の元号のように中断なく年を刻む直線的時間の上で展開する歴史という意識がまだ希薄であったと思われる。

日本で中断なく継続的に元号が定められるようになったのは、文武天皇5年3月21日（701年5月3日）に大宝元年と定められて以降である。『続日本紀』には建元とあり、木簡などの同時代の紀年はこれより以前を干支年で記し、大宝以降、年号は絶えることはなかった¹。建元とはBC140年～135年の中国最初の元号で、前漢武帝即位の翌年を建元元年にすると後で定められており²、それに擬えて大宝は当初より干支のように循環しない直線的な紀年法の最初の元号として定められたか、定められて間もなくそのような意味づけを与えられたと思われる。

1. 首皇子（聖武天皇）誕生、大宝建元と出雲系神話

対馬嶋から金が献上されたことに因んで大宝の元号が定められたと『続日本紀』は伝えている。しかし、首皇子（のちの聖武天皇）の誕生が、前漢武帝の建元に擬えられるような、それ以降中断せずに続く元号が定められた際に決定的に重要だったのではないと思われる。首皇子の誕生日は不明だが、以下のような説がある。『続日本紀』における天下大赦〔大赦天下が正しい——引用者注〕の初例は大宝元年一一月四日であるが、それより前の同年正月に役行者は赦されたと、『日本霊異記』は記している。『続日本紀』大宝元年正月二三日条には、翌年出発する遣唐使の人事が記され、鴨朝臣吉備麻呂が中位に任命されていることが、役行者の赦免と時期的に一致する。／大宝元年は、首皇子（聖武）が誕生した年であり、鴨朝臣吉備麻呂が遣唐使に中位として起用されたのは、彼の同族である賀茂朝臣比売（『尊卑分脈』は賀茂比売を吉備麻呂の孫（息子・賀茂小黒麻呂の娘）としているが、世代が合わないため、近藤敏喬編[1994]『宮廷公家系図集覧』東京堂書店、一二一頁は吉備麻呂の姉妹としている。——引用文中の注）と藤原不比等との間に生まれた藤原宮子が文武の子を妊娠したためではなかろうか。大赦が行われた11月4日が首皇子誕生の少し後とすれば、一月上旬に宮子はすでに妊娠していたと思われる。おそらく、宮子の妊娠のため、賀茂一族の役行者も帰朝を赦されたも

¹ 米田雄介編[2003]『歴代天皇年号事典』吉川弘文館、100頁。

² 当初は一元元年（BC140年）、二元元年（BC134年）、三元元年（BC128年）、四元元年（BC122年）、五元元年（BC116年）と改元され、五元3年（BC114年）に元鼎という元号（年号）がつけられ、一～四元にも元号がつけられた（藤田至善[1936]「史記漢書の一考察——漢代年號制定の時期に就いて」『東洋史研究』第1巻第5号、<https://doi.org/10.14989/138707>）。太初（BC104～101年）までは6年毎に改元される6進法だった。当初6進法が採用されたのは10元＝60年＝干支1周期というわかりやすい対応があるからだろう。

のと思われる。³」

しかし、『日本書紀』では大化2年3月19日を初例として12回大赦天下が行われ、そのほかに1回単なる大赦が行われており、大宝元年の大赦天下がとくに目新しいとはいえない。また、一族に限った恩恵は彼らが皇室の身内になったことによると考えるべきで、賀茂一族の役行者が赦され、鴨朝臣吉備麻呂が遣唐使の中位に任命されたのは首皇子が誕生した直後であると考えたほうがよいだろう。だとすれば、1月の首皇子の誕生を受けて大宝建元が企画され、実現したと考えるのが妥当ではなかろうか。山上憶良の有名な「銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも」（『万葉集』803）のように金よりも大きな宝は子宝であるが、当時存命中の持統上皇にとっておそらく初曾孫である首皇子の誕生はとりわけ目出度い慶事だっただろう。

聖武即位は神亀元年2月4日（724年3月3日）であり、そこに至るまでの間も、無事に成長して即位に至ることを祈って瑞祥などを理由にしばしば改元されつつも、元号の空白は避けられたと思われる。『古事記』『日本書紀』（両者を合わせて記紀と略称する）は首皇子の誕生以降即位以前に完成しており、父の文武天皇が崩御して以降、祖母の元明天皇、父の同父母姉である元正天皇が首皇子の即位をめざすいわゆる中継ぎ女帝として首皇子の成長を見守っていた時期に、首皇子の成人と即位とを願うなかで、直線的不可逆的な歴史意識が確立した。

首皇子の誕生・成長のプロセスにおいて、大宝建元と記紀編纂を通して日本の歴史意識の原型が形成された。天地創造から終末に至るというユダヤ教の歴史意識において、「世界の時間のモデルが、自然の回帰性でなく人生の一回性となる⁴」が、首皇子の成長期において歴史意識が形作られる際には、以下で明らかにするように、それと似て非なる世界の時間のモデルが生み出された。

大宝建元以前の日本の歴史は干支による年表記によって記述されてきた。平均寿命が短かった時代においては60年周期の干支は独りの人の一生を不可逆的に表すためにはほぼ十分であり、還暦は長寿の慶事として祝われた。干支と並んで、あるいは干支に変わって不可逆的な年数の数え方が求められるのは、独りの人の生存年数を超えた長期に及ぶ時間を通観する必要があるからで、世代交代を通じて不可逆的に変化してゆくという歴史のとらえ方が前提となる。文武から首皇子（聖武）へという父から息子への直系による皇位継承が目指されていた時期において、皇位は世代交代によっても途切れることなく継承されてゆくべきであるという意識と、元号は改元によって途切れることなく連続的に年を表現すべきであるという意識とは明らかに連動しており、首皇子の成長プロセスは両方の意識を貴族達の間で昂揚させるものだった。このことは、そのころ成立した記紀の内容を検討することによって確認できる。

記紀神話（記紀で表記が異なる神名はカタカナで表記する）において、アマテラスは持続をモデルとし、アマテラスの孫ニギハハヒは文武をモデルとしているということは、上山春平によって早くから指摘されている⁵が、それ以降の代について同様に神代と7～8世紀の対応を考えてみよう（以下の議論は、上山の着想を応用した、著者独自のものである）。

³ 平山朝治 [2012] 「日本神話にみる自由主義のなりたち」『筑波大学経済学論集』第64号、<http://doi.org/10.15068/00137840>、14頁。

⁴ 真木悠介 [1981] 『時間の比較社会学』岩波書店、180頁。

⁵ 上山春平 [1972] 『神々の体系——深層文化の試掘』中公新書、174～7頁、同 [1977] 『埋もれた巨像——国家論の試み』岩波書店、202～3頁。継体・欽明朝においては、男性として描かれる太陽神の娘がアマテラスヒルメ（天照日女）だったが、女帝が出現するようになると太陽神と太陽神の娘との間の区別が曖昧になり、持続は女帝である自身に擬えて太陽神を女神であるアマテラスだとした（平山 [2012] 二章（1）を参照）。

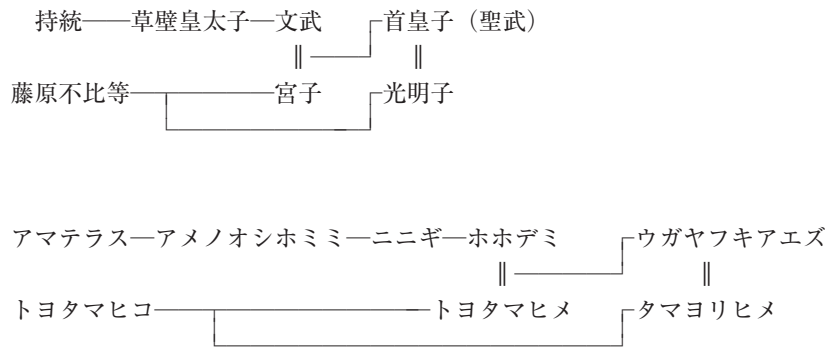


図1 持統～聖武とアマテラス～ウガヤフキアエズの系譜対応

著者作成

ニニギが文武に対応するならばホホデミは首皇子かとも思われるが、ニニギ、ホホデミ、ウガヤフキアエズの日向三代の神話は700年ころから朝廷の南九州支配が動揺し（『続日本紀』文武天皇4年6日3日条）、太宰府の軍備を強化して南九州に出兵し（同、大宝2年8月1日条）、『日本書紀』が成立した養老4年（720年）にはじまる隼人の乱に至るような朝廷の南九州統治と密接にかかわって作られており、海神トヨタマヒコの2人の娘がホホデミとウガヤフキアエズの直系二代に嫁していることから、皇室が同盟関係強化を望む相手をトヨタマヒコは寓意していることが読みとれ、文武と首皇子の直系二代に娘を配した藤原不比等に対応すると思われる。だとすれば、文武はニニギとホホデミの直系二代に対応していることになる。

神武天皇の皇后・媛蹈鞬五十鈴媛の祖父（『古事記』では父）とされるオオモノヌシについては、以下のように指摘されている。

記紀における出雲系神話の比重の高さは、オオモノヌシ神（神代紀第八段一書第六によれば、オオクニヌシの幸魂・奇魂）を祖とする大三輪氏・賀茂氏や胸形氏、とりわけ聖武の母方祖母を出した賀茂氏に対する配慮として、説明しなければなるまい（平山〔2012〕17頁）。

オオモノヌシを祭る大神氏に従属する立場から、スサノオやオオクニヌシにも許されない大御神という皇祖神の称を与えられた神を祭る存在へと、賀茂氏は大躍進を遂げているのであり、藤原宮子の母にして首皇子の外祖母という賀茂比売の存在以外に、そのことを説明するものはみあたらないし、彼女の夫である藤原不比等の力によっていることも確かであろう。

賀茂氏が奉ずる神としては、オオモノヌシ（オオクニヌシ）の子・コトシロヌシも重要であり、名からして葛城山のヒトコトヌシとのつながりが強い。神代紀第八段一書第六に「事代主神、八尋鰐に化為り、三島溝織姫に通ひたまひて、或に云はく、玉櫛姫といふ、兒姫蹈鞬五十鈴姫命を生みたまふ。是、神日本磐余彦火火出見天皇の后と為る」（小島ほか校注・訳〔1994〕『新編 日本古典文学全集2 日本書紀①』小学館一〇五頁——引用文中の注）、神武即位前紀庚申年八月一六日条に「事代主神、三嶋溝織耳神の女玉櫛媛に共に生める兒、号けて姫蹈鞬五十鈴媛」（同、二三～四頁——引用文中の注）とあり、姫蹈鞬五十鈴姫が藤原宮子に対応するなら、その母である三島溝織姫ないし玉櫛姫が賀茂比売にあたることになる。三島は摂津国の三島（茨木市・高槻市あたり）で、嶋下郡の式内社・三島鴨神社があり、『新撰姓氏録』「摂津国神別」には「賀茂朝臣同祖。大国主神之後也」とされる鴨部祝が載っている。（佐伯有清〔1962〕『新撰姓氏録の研究 本文篇』吉川弘文館、二五八頁——引用文中の注）。溝咋神社も嶋下郡の式内社である。

以上のような対応関係から演繹すれば、三島溝織姫の夫、コトシロヌシに対応するのは、賀茂比売の夫、藤原不比等である（平山〔2012〕94頁）。

乙巳の変の直前である皇極三年三月一日、「中臣鎌子連を以ちて神祇伯に拜す。再三固辞びて就らず。疾と称して退でて三島に居り。」（小島ほか校注・訳〔1998〕『新編 日本古典文学全集

4 日本書紀③』小学館八五頁——引用文中の注)とあり、『多武峰略記』所引『荷西記』によれば、鎌足は薨去後まず、摂津国下嶋郡(三嶋郡が上嶋・下嶋二郡に分かれた)阿威山に葬られ、帰朝した不比等の兄・定慧によって多武峰に移された(高槻市阿武山古墳に埋葬されていたのは鎌足だとする説が有力である(http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi/kohun_abuyama.html)。そうだとすれば、定慧は誤って別人の骨を多武峰に改葬したことになる。——引用文中の注)。このように、鎌足のころから中臣・藤原氏は摂津国三嶋郡と関係が非常に深いのであり、その地で不比等は賀茂比売を娶ったのか、あるいは摂津の鴨氏の取り持ちで賀茂比売と結ばれたなどと想像できる。いずれにせよ、摂津の三嶋は、藤原氏と賀茂氏の接点なのである。したがって、三嶋の姫とその夫としてのコトシロヌシが賀茂比売と不比等を念頭に描かれていることは、間違いなからう(平山[2012] 95頁)。

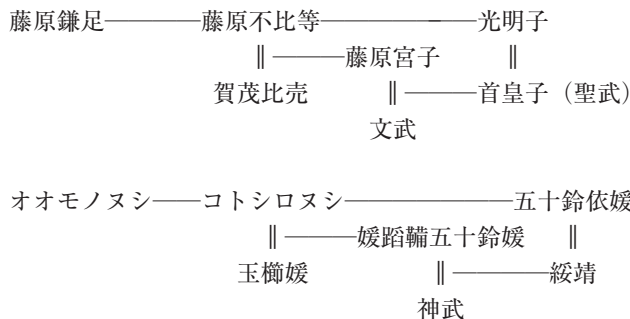


図2 藤原氏と出雲系神話の系譜対応
出所: 平山[2012] 96頁によって著者作成。

このように、皇室の外戚として発言権を増した藤原不比等や、不比等との間に宮子を生んだ賀茂氏(男系でみると皇室の外戚の外戚だが、首皇子の属する女系氏族)と、それに対応する神話とをみると、出雲系神話が記紀において重視されている理由がわかる。『古事記』や『日本書紀』神代紀第八段一書第六によれば、オオモノヌシが海を渡って出雲にやってきたとされるが、図1で藤原不比等が海神トヨタマヒコに対応するのも、オオモノヌシとトヨタマヒコが共に海と結びつくからであろう。

以上より、文武と首皇子を中心とする現実世界に対応するものが、神話時代(神武とそれに続く第9代開化までのいわゆる欠史八代)において繰り返し登場している。通例、神話と歴史は祖型とその反復であるが、その逆に、特定の歴史が重視されて祖型となり、過去に遡って反復しつつ描かれるなかで神話が展開され、そのみならず神話が天地開闢以来の不可逆的時間に沿って展開する歴史的物語となっているのであり、これは天地創造にはじまるユダヤ・キリスト教的な直線的歴史意識ときわめて近い。

2. キリスト受肉紀元の日本元号への影響

神武元年正月朔に神武は即位したとされ、神武紀元(皇紀)は前漢武帝の即位翌年を元年とする中国の紀年法(当初は元号がなく6進法だった)と近いものであると言える。ただし、神武紀元を元年(1年)とする10進法によって暦年を算えるのは、明治になって太陽暦(グレゴリウス暦)が導入されるとともに西暦紀元に変えて神武紀元が採用されて以降のものである。元号を701年5月3日に建元するのならば、文武天皇元年(697年)をもって遡って大宝元年とし、建元時点は大宝5年とするのが中国の建元に倣ったやり方であり、文武の子である首皇子の誕生年をもって元年とする際には、それとは異質な暦年思想の影響があったと思われる。

その候補としては、イエス・キリストが誕生したと信じられていた年の翌年⁶を元年とするキリスト受肉紀元 (Anno Domini nostri Iesu Christi, AD) の影響が考えられる。記紀が編纂された7世紀後半から8世紀はじめにかけての歴史を過去に投影して反復しながら不可逆的な物語が展開されることがユダヤ・キリスト教の歴史意識に似ていることも、そのころ日本にキリスト教やADが伝わり、記紀がその影響を受けて編纂されたことによって説明できる。

ADは西方よりも東方で早く伝播したらしく、635年の東シリア教会キリスト教⁷（景教）中国公伝直後に「向五蔭身六百四十一年不過」（『一神論第三』『世尊布施論第三』第149行）とあるように、641年ころには既にキリスト教とともにADが唐に伝わっていた⁸ので、それが日本に伝えられた可能性はある。『日本書紀』の聖徳太子伝にキリスト伝の影響があるとする主張は近代日本史学の草分けである久米邦武の説⁹としてよく知られているが、定説とは言えず、「景教の知識が日本に伝わったという徴証は、他に全然見当らぬのであるから、ここにだけその影響を見ることは危険である¹⁰」などと批判されて、実証的には疑わしい仮説とされている。しかし、日本神話が天地開闢以降の不可逆的な歴史的時間のなかで展開される物語となっていることや、首皇子の誕生によって大宝元年以降の連続的な紀年が始まったことは、久米説を支持する徴証と言えるのではなかろうか？

大宝元年は701年であり、大宝元年からの通年を日本の紀年とすれば、AD マイナス700がそれになるというように、ADと大宝紀元との間に単純な対応関係があることも、ADが大宝建元に影響したことの傍証のひとつとなる。キリスト生誕の700年後に生まれた首皇子がキリストに擬えられるのは自然であり、ADの発想と中国の元号の発想が合わさって大宝建元となったのだろう。

皇紀とADとの間にも似たような対応関係がある。1940年（昭和15年）は皇紀2600年であり、戦争がなければ東京オリンピックの開催など国を挙げて大々的に祝われるはずだった年であり、661年マイナスBCの西暦年およびADの西暦年プラス660年が皇紀となり¹¹、660年は60年周期で一巡する干支の11回分に当たる。

神武元年（BC660年）は辛酉革命説に拠っているとされるが、それに60×11年を足すと得られるAD元年も辛酉年である。辛酉革命説は後漢の『易緯鄭玄注』にみられるとされるが、『易緯』やその鄭玄注とされるもののなかに唐代に作られた部分があることがすでに指摘されており、辛酉革命説自体も唐代の661年における、高宗の皇后となった武則天の実権掌握に伴う龍朔改元を事前あるいは事後に正当化するために生まれたのではないと思われる¹²。したがって、神武紀元と辛酉革命説のもとになったと思われる龍朔元年のちょうど真ん中にAD1年があり、いずれも辛酉年であるという、偶然ではまずあり得ないような関係が3つの元年にはある。

661年は日本において、斉明女帝が九州に出征して崩御し、天智称制が開始された年で、中臣鎌足とともに蘇我入鹿を倒した中大兄皇子にとって即位年に準ずる意味を持ち、大和から九州に赴いて称制を開始した天智と、九州から大和に赴いて即位した神武とは双対関係にあると言える。

『易緯鄭玄注』は1320年を一部とし¹³、日本の神武元年もそれに従ってBC660辛酉年とされた。なぜ

⁶ イエス・キリストの誕生日は異教の〈太陽の誕生祭〉に倣って4世紀後半には毎年12月25日に祝われるようになり、1月6日の顕現日までが降誕節とされた（柚木康 [1988]「クリスマス」『キリスト教大事典 改訂新版』教文館、350-1頁）。

⁷ 従来「ネストリウス派」と呼ばれてきたが、それは他からの蔑称であるため最近「東方教会」「東シリア教会」などと呼ばれるようである（諫早庸一 [2018]『マニ教とイエスの習合、美術史と文献研究の習合』2018/01/19、https://researchmap.jp/index.php?page_id=1455555#_2237052）。

⁸ 羽田享 [1923]「漢訳景教経典に就いて」『史林』第8巻第4号、158頁、平山朝治 [2015]『聖徳太子伝ルートはキリスト伝：キリスト教伝来のインドルートを探る』<http://hdl.handle.net/2241/00125293>。

⁹ 久米邦武 [1903]『上宮太子実録』（久米邦武 [1988]『久米邦武歴史著作集 第一巻 聖徳太子の研究』吉川弘文館）。

¹⁰ 坂本太郎 [1979]『聖徳太子』吉川弘文館、12頁。

¹¹ 天文学の紀年法をのぞいて紀元0年は存在せず、BC1年の翌年はAD1年である。

¹² 平山朝治 [2005]『改元・官僚制・革命（改訂版）』<http://hdl.handle.net/2241/100801>、6-7頁。

¹³ 1260年を一部とする説に対する批判は、安居香山 [1983]『中国神秘思想の日本への展開』大正大学出版部、平山 [2005]「Ⅲ 革年改元の起源」を参照。

661年を過去に遡る起点とし、AD 1 年を中央として、BC660年を重要な年とし、1320年を一節とするような年代観が生まれたのかを説明する必要がある。平山〔2005〕は、武則天が弥勒下生とされていることと、AD 1 年がイエスの生年とされていたこととをともに、BC660年は釈迦の生年とされたのではないかとしているが、釈迦の誕生年には諸説あるものの、BC660年説そのものやそう算出できるような史料は伝わっていない。龍朔改元やキリスト生誕に比肩しえる出来事は釈迦誕生なので、一節を重視する辛酉革命の年代観にあわせて釈迦の生誕年がBC660年とされたのではなかろうか¹⁴。

690年、弥勒下生として武則天の登位を正当化する「証明因縁識」などの識文によって経文を解釈した『大雲経疏』をふまえて、『大雲経』を収めた大雲寺（大雲経寺）が各州に置かれ、武則天は登位した。661辛酉年から約30年後に武周革命を正当化すべく1320年を一節とする辛酉革命思想ができたとは考えにくい、武則天弥勒下生説を述べた「証明因縁識」は『大雲経疏』が作られたときにはすでに存在していた可能性が高い¹⁵。したがって、武則天が皇帝になるという易姓革命よりかなり前に、実権掌握を正当化するものとして弥勒下生説が生まれたのかもしれない。『大雲経疏』には「証明因縁識」のほかにさまざまな識文が引用されており（坪田〔1996〕51頁）、武則天の台頭とともに識緯思想が流行し、辛酉革命説も後漢の『易緯鄭玄注』に仮託されて作られたのであろう。

マニ教は仏教やキリスト教を取り入れ、それらを装って布教したので、釈迦とキリストと武則天（弥勒下生）とを同列に扱うのはマニ教的と言ってもよいだろう。大雲寺の旧名は光明寺で¹⁶、マニ教寺院とされることもあり¹⁷、「唐は安史の乱平定のためウイグルに援軍を請うたのでウイグルの発言が強まり、その信仰するマニ教の会堂設置を認め、大暦3（768）年これに大雲光明寺の額を与えた。3年後に荊、揚、洪、越の諸州にも同名のマニ寺が建てられ、元和2（807）年には洛陽、太原にもマニ寺がおかれた。¹⁸」しかし、中国北部で579年に亡くなった人の墓が最近発掘され、6世紀後半にはすでにマニ教が伝わっていたことが明らかになった¹⁹。光明寺・大雲寺でマニ教は仏教とともに伝えられ、768年に正式のマニ教寺院として大雲光明寺が設置されたのではなかろうか。また、「中国にとってのマニ教の魅力は、バビロニア伝来の優れた天文学と暦の知識にあった。このころ中国では暦の改訂が進められていたため、マニ教教師の知識が求められていたのである。²⁰」麟徳2年（665年）から開元16年（728年）にかけて唐で使われた麟徳暦が準備されていたところに龍朔改元が行われた。したがって、661年ころマニ教が辛酉革命思想や一節1320年説の形成に影響を与えた可能性は低くないと思われる。

西暦1年と唐の龍朔元年や日本の天智称制開始年である661年の干支がいずれも辛酉であり、神武即位年もそれらに基づいて辛酉のBC660年正月朔（ユリウス暦BC660年2月18日、グレゴリオ暦同年同月11日、建国記念の日）に求められたということも、キリスト教ないしマニ教の影響が日本に及んだひとつの徴候である。しかし、久米説によればそれらをもたらししたのは遣唐使の官人あるいは留学僧であり、彼らに唐、とりわけ長安において東シリア教会ないしマニ教について何らかの知識を得る

¹⁴ 釈迦の誕生年（仏滅の80年前）はBC1029年（『周書異記』）、BC624年（南伝）、BC566-5年（南伝に基づく『歴代三宝記』の衆聖点記）、BC563（南伝に基づく近代の説）、BC463（北伝に基づく中村元説）などの諸説があり（山崎元一〔1984〕「仏滅年代について」『東洋学術研究』106号）、661年ころ中国で知られていたと思われるのはBC1029年とBC565-6年で、BC660はその間にある。

¹⁵ 坪田昭子〔1996〕「彌勒としての武則天——『大雲経疏』の考察」『信大言語教育』第5巻、<http://hdl.handle.net/10091/13718>、50頁。「『証明因縁識』は彌勒が慈氏と訳されることから、慈悲は女性の象徴であり、彌勒がとりもなおさず太后（武則天）のことであるとして、太后は彌勒仏の下生で閻浮提の主たるべき人であるという教説を作り上げたのである。」（同）

¹⁶ 「大雲経寺（本名光明寺隋開皇四年文帝為沙門法經所立時有延興寺僧曇延因隋文帝賜以蠟燭自然發焰隋文帝奇之將改所住寺為光明寺曇延請更立寺以廣其教時此寺未制名因以名焉武太后初幸此寺沙門宣政進大雲経經中有女王之符因改為大雲経寺遂令天下每州置一大雲経寺此寺當中寶閣崇百尺時人謂之七寶臺）」（『長安志』卷十、<https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&chapter=457321>、2019年6月6日閲覧）〈 〉内は割注）

¹⁷ 加藤武「大雲寺（中国）」『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館、<https://kotobank.jp/word/大雲寺%28中国%29-1560405>、2019年6月3日閲覧。

¹⁸ 「大雲光明寺」『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』2014年、<https://kotobank.jp/word/大雲光明寺-90811>、2019年6月19日閲覧。

¹⁹ La Vaissière, Etienne de〔2005〕“Mani en Chine au VI^e siècle”, *Journal Asiatique*, Vol.293 No.1, pp.357-8.

²⁰ 山本由美子〔1998〕『マニ教とゾロアスター教（世界史リブレット）』山川出版社、71頁。

機会がなかったはずはないが、それらについて積極的に学んだり、それらを信仰するようになった者がいたという記録はない。渡唐した官人あるいは僧侶によって公式にそれらの漢訳教典が日本にもたらされたという記録もないらしい²¹。そういう理由から、聖徳太子伝に唐経由でキリスト教の影響があるとする久米説に対しては、実証的な裏付けを欠くという批判が大勢を占めているのではないかとも思われる。

3. インド・東南アジア経由のキリスト教・銀貨伝来と善光寺・祇園信仰

7世紀後半の日本にキリスト教ないしマニ教が伝わり得たのはシルクロード・長安という陸路による中国経由だけではない。キリスト教は12使徒のひとり聖トマスが1世紀半ばのインドに伝えてトマス派と呼ばれ、のちにペルシャから伝わった東シリア教会と混然一体化したようであり²²、インドから海路東南アジアを経て日本に伝わったという仮説もなりたちえる（この仮説を提示した先行研究は管見の限り著者自身のもの以外に存在しない）。その可能性を示唆する海路による渡来としては、7世紀後半にドヴァーラヴァティー（現在のタイ国チャオプラヤー川下流域）から日向に漂着した人々がいるので、彼らに関する記録を、以下に挙げる²³。

- ① 吐火羅国男二人・女二人、舍衛女一人、被_レ風流_二来于日向_一。（『日本書紀』白雉5（654）年4月）
- ② 視貨邏国男二人・女四人、漂_二泊于筑紫_一、言臣等初漂_二泊于海見嶋_一、乃以_レ駅召。作_二須弥山像_一于飛鳥寺西_一。且設_二孟蘭盆会_一。暮饗_二視貨邏人_一。〈或本云、墮羅人。〉（同、斉明3（657）年7月3日、15日、〈 〉内は割注）
- ③ 吐火羅人共_二妻舍衛婦人_一来。（同、同5（659）年3月10日）
- ④ 高麗使人乙相賀取文等罷帰。又都賸羅人乾豆波斯達阿欲_レ帰_二本土_一、求_二請送使_一曰、願後朝_二於大國_一。所以留_レ妻為_レ表。乃与_二数十人_一入_二于西海之路_一。〈高麗沙門道蹟日本世記曰、七月云云。春秋智借_二大將軍蘇定方之手_一。使_レ擊_二百濟_一亡之。或曰。百濟自亡。……〉（同、同6（660）年7月16日、〈 〉内は割注）
- ⑤ 大学寮諸学生、陰陽寮・外葉寮及舍衛女・墮羅女・百濟王善光、新羅仕丁等、捧_二葉及珍異等物_一進。（同、天武4（675）年正月朔）。

彼らはドヴァーラヴァティーからの遣唐使だったが日本に漂着したので、それらの漢字名は当時の中国語の意味を帯びているはずであり、乾豆波斯達阿（④）と舍衛女（①）妻舍衛婦人（③）は、名前からしてインド人であったことが読みとれる。「乾豆」はインド、「波斯」はペルシャであるが、出身地としてインドとペルシャが並列するのはおかしい。当時唐では東シリア教会キリスト教はペルシャから伝わったためその僧侶は波斯僧、教えは波斯経教、寺院は波斯寺と呼ばれていた²⁴ので、「乾豆波斯」とはインドのキリスト教という意味で、「達阿」はインドの人名末尾であり、妻の「舍衛」はインドのコーサラ国の漢訳名で、漢訳仏典にしばしば登場し、舍衛城の南に祇園精舎があった。「乾

²¹ 西本願寺には景教の漢訳經典『世尊布施論』が伝えられており、法然や親鸞が読んだという説があるが、真偽を確かめた研究はないようだ。20世紀初頭の西本願寺の大谷光瑞が組織した探検隊がもたらしたものが過失か故意で古くから日本に伝来したものとして紹介されたことがあったのかもしれない。

²² 平山朝治〔2009-3〕『平山朝治著作集 第3巻 貨幣と市民社会の起源』中央経済社、「Ⅱ-1章 大乘仏教の誕生とキリスト教」「Ⅱ-2章 一世紀の思想革命とローマ帝国・インド間貿易」を参照。

²³ 漢文は小島憲之ほか校注・訳〔1998〕『新編日本古典文学全集 日本書紀③』小学館、による。

²⁴ 「大秦寺／／貞觀十二年〔637年〕七月。詔曰。道無常名。聖無常體。隨方設教。密濟群生。波斯僧阿羅本。遠將經教。來獻上京。詳其教旨。元妙無為。生成立要。濟物利人。宜行天下所司。即于義寧坊建寺一所。度僧廿一人。／／天寶四載〔745年〕九月。詔曰。波斯經教。出自大秦。傳習而來。久行中國。爰初建寺。因以為名。將欲示人。必脩其本。其兩京波斯寺。宜改為大秦寺。天下諸府郡置者。亦準此。」（『唐会要』卷四十九、<http://www.guoxue123.com/shibu/0401/01thy/051.htm>、2019年6月17日閲覧、<https://dokochina.com/sim2traconv.php>によって繁体字に変換）

豆波斯達阿の妻が舎衛婦人と呼ばれるのは、三八四～五年に漢訳された『増一阿含經』卷二八（大正二）にある、最初の仏像を巡る次のような伝説に因んだものと思われる（要旨は高田修[一九六七]『佛像の起源』岩波書店、一〇～一頁による）。『釈尊が祇園に住していたとき、誰にも告げずに三十三天に昇ってそこに再生していた生母摩耶夫人に三ヶ月間説法した。僑賞弥国の優填王と拘薩羅国舎衛城の波斯匿王は行方不明の如來を思慕するあまり病臥した。群臣の建言によって優填王は牛頭栴檀で五尺の仏像を作り、これを聞いた波斯匿王も紫磨金で同じく五尺の像を作った……。』つまり、乾豆波斯達阿は、そのなかにある「波斯」によって、黄金の仏像を作った波斯匿王と関連づけられて拘薩羅国舎衛城あたりの人とみなされ、妻も舎衛婦人と呼ばれたとみることができる。（平山[2009-3] 88-9頁）このように、漂着した人々はインド人キリスト教徒夫婦に率いられていたと思われるが、最初の黄金の仏像を作った波斯匿王ゆかりの夫婦だと思われ、以下で触れる善光寺本尊を巡る伝説もそのことをふまえている（平山[2009-3] 77頁以下を参照）。

天智天皇のころに作られはじめたと思われる、無文銀銭と呼びならわされてきた銀貨は、当時の東南アジア大陸部の国際通貨として使われていた銀貨の大きさと重さ（直径約28～33mm、重さ9.2～9.4g）に従い、しばしば上下と左右がほぼ等しいギリシャ十字が刻まれており、その計数単位である「杧」はインドを表す「梵」の「木」がひとつだけというあまり使われない漢字であり、インド人夫婦のうち夫が帰国したのち日本に残った妻がこの銀貨の製作を指導したことに由来するものと思われる（同、55頁以下、145頁以下を参照）。



図3 東南アジア大陸部の標準銀貨と十字刻印入り杧銀貨

左（裏・表・断面）：R. S. Wicks [1992], *Money, Markets, and Trade in Early Southeast Asia: the Development of Indigenous Monetary Systems to AD 1400*, Ithaca, p.117.

中：真宝院出土（「データベースれきはく」<https://www.rekihaku.ac.jp/doc/t-db-index.html> で、「館蔵資料（画像付き）」をクリックしてフリーワードに「無文銀銭」を入力した結果のうち、資料番号 H-242-29-3-1、2019年4月13日閲覧）

右：崇福寺跡出土（国立歴史民俗博物館編[1998]『お金の不思議——貨幣の歴史学』山川出版社17頁）

鑄貨（計数金属貨幣・コイン）と大宝建元以降途切れることなく続いてきた元号には、共通点がある。1にはじまる自然数によって数えることである。中国で建元当初6年1元の6進法がとられていたように、年数の十進法的表記も一種の改元法とみなすこともできる。10年ごとに改元し、最初は0元元年、0元11年は1元元年、……という風に、予め決められたルールに従って改元してゆくやり方として十進法を表現することができる。

つまり、天智朝における杧銀貨の流通によって、1に始まり無際限に増えてゆくという自然数の数観念が人々の日常意識にしだいに定着し、年数も60年周期の干支よりもそのような数観念によって数えたほうが便利だとみなされるようになることが、大宝以降元号が途絶えることなく定められる前提になっていると思われる²⁵。さらに、大宝建元以降の日本の元号は中国の元号だけではなくADの特性

²⁵ 「数量としての時間が、鑄貨、すなわち貨幣のそれ自体としての製造を需要するまでに成熟し展開された商品世界においてはじめて明確に客観化された表現を獲得する」（真木[1981] 182頁）。

を持ち、キリスト教の影響が日本特有の鋳貨と紀年法とともに生み出したのである。

日本初の鋳貨のモデルとなったのはインド人キリスト教徒が日本にもたらした東南アジア大陸部の国際通貨であって中国の銭貨ではなく、当時の代表的な中国銭貨である開元通宝（開通元宝）の大きさ（直径24mm）、重さ（4g前後）や円形方孔の形を模した日本最初の銅銭である富本銭は帆銀貨の使用を禁じて流通させようとしたために失敗し、それに学んで、最初の皇朝十二銭である和同開珎はまず銀銭として発行されて帆銀貨の流通力を継承し、やがて銅銭が発行された²⁶。

乾豆波斯達阿とその妻舍衛婦人のように、インドから中国を経由せずに日本に来たものとして有名なのは、⑤の百済王善光に因んでいると思われる善光寺の本尊如来であり、善光寺本堂の最も古い絵画（図4）では屋根が十字型だった（平山〔2009-3〕76頁以下を参照。善光寺創建にキリスト教の影響があることを論じたものは研究史上、このもとになった論文²⁷が最初である）。

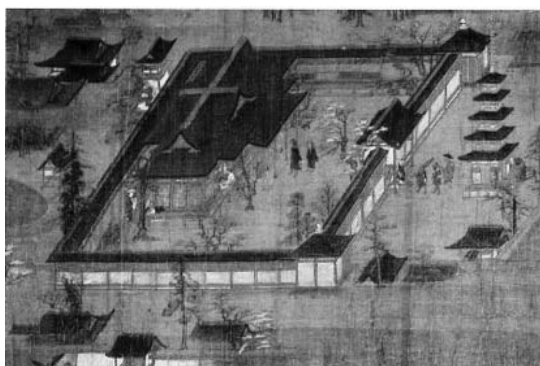


図4 聖戒編『一遍聖絵』京都市・歓喜光寺所蔵、善光寺（1299年ころ）
長野県編〔1986〕『長野県史 通史編 第二巻 中世一』長野県史刊行会、口絵

④において、乾豆波斯達阿の記録は百済滅亡に至る朝鮮半島情勢をめぐる記述のなかに置かれており、彼は日本人数十人とともにドヴァーラヴァティーに向かい、妻を人質として残した日本に帰ることを誓っているの、唐・新羅連合軍の攻勢に対抗すべくドヴァーラヴァティーとの同盟をめざすことが彼らのミッションだったことは明らかだろう。善光寺の寺名は、百済王族として日本に滞在し百済滅亡後は亡命した百済王善光に由来し、インドから中国を経由せず朝鮮半島を経て日本に善光寺本尊が到来したとする由来譚は、乾豆波斯達阿が唐・新羅連合軍に攻められた百済・日本との同盟をめざしてドヴァーラヴァティーに一時帰国しようとしたと思われることや、⑤に「舍衛女・墮羅女・百済王善光」とあるように百済滅亡後もインド・ドヴァーラヴァティーから渡来した人たちと百済王善光は近い関係にあったと思われることを反映しているのだろう（平山〔2009-3〕91頁）。「江戸時代に銀貨一〇〇枚ほどを出土した大阪市天王寺区真宝院（真法院）は、富本銭、和同開珎枝銭などを出土した百済尼寺跡（細工谷遺跡）や、百済寺跡とみられる堂ヶ芝廃寺の近くで、百済王氏の本拠地に属する（大阪市文化財協会〔一九九九〕『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』一〇～四頁——引用文中の注）。この地域が四天王寺の東北にあたることは、〔善光寺の——引用者注〕守屋柱が四天王寺の良角柱だったという伝承を想起させるなど、善光寺と四天王寺・聖徳太子信仰との密接な関連ともつながる。」「四天王寺近くの百済寺が移転して信州善光寺になったと示唆する言い伝えがあった（坂井衡平〔一九六九〕『善光寺史 上下』東京美術、九一頁——引用文中の注）。／百済王善光と彼の子孫たちが帆銀貨から和同開珎にいたる貨幣製造と善光寺創建に深く関わっていたことは、四天王寺周辺の伝承や出土品によって裏付けられる。また、渡来系女性が多くいたはずの百済尼寺が和同開珎鑄造所の一つであったことは、東南アジア標準に従った銀貨を発案したのがドヴァーラヴァティーから渡来し

²⁶ 今村啓爾〔2001〕『富本銭と謎の銀銭——貨幣誕生の真相』小学館、平山〔2009-3〕145頁以下を参照。

²⁷ 平山朝治〔2006〕「貨幣の起源について」『筑波大学経済学論集』第55号、<http://doi.org/10.15068/00137871>。

た女性たちであったことによってうまく説明できる。」(平山 [2009-3] 91頁)

善光寺へのキリスト教の影響は以下の諸点などにもあらわれている。善光寺の開山御三卿として、善光、弥生と彼らの息子善佐の三人が祀られている。キリスト教の聖三位一体像においては父なる神の右にキリスト、左に聖霊を意味する女性が位置するが、善光寺の開山三卿像は父善光の右に善佐、左に弥生がいるように聖三位一体像に由来し、善佐はキリストであると思われる。善佐が地獄で出会った斉明女帝といっしょに復活するという『善光寺縁起』(『続群書類従』第28輯上 釈家部 巻第814) 巻第三の話など、シリア系キリスト論に似た話が伝えられ、善光寺最大の秘儀である12月2の申の日の夜に行われる御越年式は善佐の生誕祭でクリスマスに由来すると思われ、正月7日の御印文加持においても本堂内々陣中央の善佐が秘仏一光三尊像より格上の、真の救い主と意味付けられ、七年に一度(六年周期)の前立本尊開帳は、秘仏本尊を安置する瑠璃壇の前ではなく善佐像前で行われ、戒壇巡りにおける極楽の錠前は善佐像のほぼ後方(図5の♥)にあり、極楽の錠前は、イエスが「あなたたちは、私を誰だと言うのか」と問うたのに対して「あなたこそキリスト、活ける神の子です」と答えたペテロが天国の鍵を与えられ、「その後、彼は、自分がキリストであることを誰にも話さないように、弟子たちに命令した」という『マタイ福音書』(16:15-17:19)をふまえていると思われ、瑠璃壇前で焼香参拝するとき三卿の間と瑠璃壇とを仕切る板壁にある影向窓を通して三卿の間の善佐が見え、影向窓の北側にある「守屋柱」は十字架の立柱だと思われ、図5の灰色矢印のように、影向窓の向こうの善佐は十字架上のキリストを表わしている²⁸。また、善光寺巡礼・戒壇巡廻はメッカ巡礼・カアバ神殿巡廻に似ており、善光寺信仰は、日本人にとって異質とされてきたユダヤ教、キリスト教やイスラム教といった一神教の伝統を今日まで濃厚に伝えてきた(平山 [2015] 15頁)。

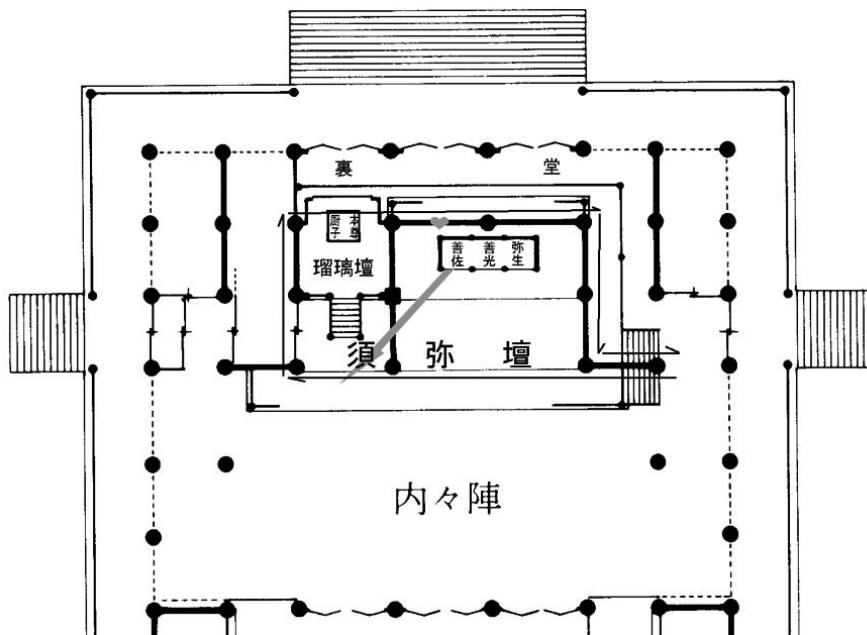


図5 善光寺本堂内々陣以北の平面図

出所：長野県編 [1990] 121頁図1 (「内々陣」以外の活字と矢印を加筆)

²⁸ 以上、詳しくは平山 [2009-3] 98-110頁、平山 [2015] 6-8頁を参照のこと。なお、査読者より、京都伏見稲荷大社の鍵をくわえた狐の眷属が「天国の鍵」との関連で重要であり、善光寺の良(北東)の方向に稲荷社があればさらに示唆的であるとの指摘があった。すでに引用したように、善光寺の守屋柱は四天王寺の良角柱に由来し、信濃に移転する前の善光寺は大阪四天王寺近くの百済寺であったと伝えられており、四天王寺の良に稲荷大社が位置する。また、上野三碑、とりわけ「胡」という地名と「羊」という人名との関連についても考察するよう査読者に求められており、今後の課題としたい。



図6 善光寺の光三尊（御前立本尊）と開山三卿

出所：左 五来 [1988] 45頁

右 文化財建造物保存技術協会編 [1999] 『国宝善光寺本堂保存修理工事報告書』
善光寺、口絵5頁下

善光寺の創始については、死後生き返れることになった善佐が地獄で皇極（＝斉明）女帝に出会い、いっしょに復活したという『善光寺縁起』の話を重視すれば皇極・斉明朝が画期であり、657年（斉明3年）に②ドヴァーラヴァティーの人々が筑紫から召されて飛鳥で盂蘭盆会が催されたことがもとなっているのであろう。というのは、『盂蘭盆経』²⁹は「聞如是一時仏在舍衛国祇樹給孤独園大目乾連始得六通欲度父母報乳哺之恩即以道眼觀視世間見其亡母生餓鬼中……」と、舞台が舍衛国の祇樹給孤独園すなわち祇園精舎であり、餓鬼道に堕ちていた目蓮の母を釈迦が救うという筋と、善佐が地獄で会った皇極女帝とともに復活するという筋は似ているので、シリア系キリスト論の冥府降りと『盂蘭盆経』とは混同ないし同一視されやすいと思われ、キリスト教と祇園とを強く結びつける契機になったと思われる。

東シリア教会キリスト教の影響を強く受けて創建された寺社として、善光寺と並んで祇園社ないし八坂神社を挙げることができる。このことを論じた研究は、著者自身のものも含めてこれまで存在しなかった。

祇園社の創建は、社伝『八坂郷鎮座大神之記』に「齊明天皇即位二年丙辰八月韓國之調進副使伊利之使主／再來之時新羅國牛頭山^ス座^ス須佐之雄尊之神御魂^ヲ齋祭來而／皇國^ニ祭始依^レ之愛宕郡^ニ賜^ハ八坂郷並八坂造之姓^ヲ十二年後／天智天皇御宇六年丁卯社^ヲ號^ス為^ス感神院宮殿全造營^ニ牛頭／山坐之大神^ヲ牛頭天王^ト奉^レ稱^ス祭祀畢^ス／淳和天皇御宇天長六年右衛門督紀朝臣百繼^ル感神院祀^ニ官並八坂造^ノ之業^ヲ賜^テ為^ス受續^ニ／（以下略）³⁰」とあるように、656年（斉明2年）に高句麗の伊利之使主が伝えた神を祭ったことにはじまるらしい³¹。ドヴァーラヴァティーからのインド人キリスト教徒夫妻の来朝と時

²⁹ 『盂蘭盆経』は西域か中国で作られた偽経とする説が従来有力だったが、最近ではインドで作られたとされている（Karashima, Seishi [2013] “The Meaning of Yulanpen 盂蘭盆 — “Rice Bowl” on Pravāraṇā Day”, *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University*, Vol.16 No.1, <https://www.academia.edu/9211768/>, 辛嶋静志 [2013] 「『盂蘭盆』の本当の意味 — 『ご飯をのせた盆』と推定」『中外日報』2013年7月25日、<https://web.archive.org/web/20170501091520/http://www.chugainippoh.co.jp/ronbun/2013/0725rondan.html>）。

³⁰ 「八坂郷鎮座大神之記」紀纂綴編 [1870] 『八坂社旧記集録』上巻、<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/816139/7>、2019年6月15日閲覧。「承暦三^{〇〇〇}有方記」（コマ番号9-10、有方の2字は左1 / 3程度虫食い）とあるように、1079年に紀有方が著したとされている。

³¹ 祇園社の創建については、伊利之使主創建説を批判し、貞観18年（876年）僧・円如が寺院を建立したあとで祇園神が垂迹したとする説（久保田収 [1974] 『八坂神社の研究』神道史学会、「二 祇園社の創祀」）が従来有力であったが、「後代の祇園社の前身となる施設は、それ以前から存在していたとみてよいことだけは確かである。」（五島健児 [2002] 「『祇園信仰』七つのキーワード」、真弓常忠編 [2002] 『祇園信仰事典』戎光祥出版、33頁）のように、創建を久保田説より前に遡らせ、伊利之使主とする社伝を重視するようになってきた。また、「蘇民将来之子孫者」と書かれた8世紀末の木札が長岡京右京六条条間南小路北側溝から出土した（中島皆夫 [2002] 「右京第688次調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報平成12年度』）ので、平安時代より前に蘇民将来伝説が流布していた。「齊明天皇即位二年丙辰八月韓國之調進副使伊利之使主／再來」が『日本書紀』の「是歳、高麗・百濟・新羅、並遣^リ使進調。」（斉明元年（655年））「高麗遣^リ達沙等進調。〈大使達沙。副使伊利之。総八十一人。〉」（斉明2年（656年）8月8日、〈 〉内は割注）と整合的であることも社伝の信頼性を示唆する。

期的に重なり、④によれば「高麗使人乙相賀取文等罷帰」と同じ日に乾豆波斯達阿らも帰国している
ので両者は百済救援という同じ使命を帯びて北九州までは同道していたと思われ、660年の百済滅亡
に続いて高句麗も668年に滅亡しているので、その後も祖国を失った高句麗の人々は百済王善光や舍
衛婦人と密接な関係にあったと思われる。伊利之使主は再来の翌年、ドヴァーラヴァティーの人々と
共に孟蘭盆会に参加し、このとき彼のもたらした神はキリスト教の神と同一視されて祇園精舎と結び
つけられることになったのではなかろうか。祇園社創建は天智天皇6年(667年)とされ、近江大津
宮と祇園の交通は現在の京阪京津線沿いの逢坂山関・栗田口を通る道(逢坂越え・旧東海道)が比較
的平坦で至近距離であり、天智天皇の母斉明天皇を供養する意味を銘文から読みとることのできる机
銀貨が京都市左京区北白川にある小倉町別当町遺跡から出土している³²ように、大津京を中心とする
机銀貨流通圏に京都盆地東側の祇園～北白川も含まれており、祇園社・八坂神社のもとになった感神
院は創建当初、舍衛婦人のキリスト教信仰の影響を受ける可能性の高い時期と場所にあった。祭神は
牛頭天王やスサノオとされる以前には単に天神とされており³³、一神教の神は嵐を司る天候神である³⁴
ため天神と呼ばれたと思われる。

八坂の五重塔で知られ、八坂造の氏寺であったと思われる法観寺境内から出土した古い軒丸瓦は7
世紀中頃～後半のものである³⁵ことも、伊利之使主が656年(斉明2年)に八坂郷と八坂造の姓を賜っ
たことを支持する。法観寺の近くには小野篁の冥土通いの井戸と黄泉がえりの井戸のある六道珍皇寺
があり、善佐が皇極天皇と地獄から蘇ったという『善光寺縁起』と同様、シリア系キリスト論の冥府
降りに由来すると思われる。こう考えると、あの世の先祖がこの世に帰ってくるという日本独特の孟
蘭盆会はキリストの冥府降りや死者の甦りの影響を顕著に受けたものと推測できる。

牛頭天王信仰はインドから百済を経て日本に飛来し、大化5年宮中に召されて孝徳天皇の病気を治
し、後に帰国した法道仙人がもたらしたとされ³⁶、同時期にドヴァーラヴァティーから渡来し、日本人
を連れて帰国した乾豆波斯達阿が、自在に飛翔し、飛鉢を操る法道仙人のイメージのもとになったの
だろう。法道は播磨国法華山に降り立たとされているが、法華山一乗寺の北方古法華山中に石造の
厨子入り三尊像があり³⁷、7世紀後半に地元産の凝灰岩で作られ、破損が著しいものの中央は弥勒仏の
倚坐像かとされている³⁸が、古法華山でも法道が来日したとされるころから善光寺本尊と同様の三尊
像があることは、牛頭天王信仰と善光寺信仰の根源が重なることを示唆しているのではなかろうか？
善光寺の厨子入りの秘仏三尊像はインドで如是姫をはじめ国中のの人々の悪疫を治したとされ、古法華
山中の厨子入り石仏三尊も同様に秘仏で、悪疫を治す霊験があるとされ、紫磨金の像と対の牛頭栴檀
の像とみなされ、それと過越の神がもとになって牛頭天王のイメージが形成されていったというよう

³² 平山 [2009-3] 52-4頁、長戸満男 [2007]「無文銀銭試論」『財団法人京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第10号、<https://www.kyoto-arc.or.jp/News/kenkyu/10nagato.pdf>。

³³ 『二十二社註式』所引「承平五年(935年)六月十三日官符」(『群書類従』第二輯 神祇部 卷第二十二、236頁)、五島 [2002] 31-2頁。

³⁴ 安田喜憲 [2009]『蛇と十字架——東西の風土と宗教 新装版』人文書院、「Ⅱ 蛇を殺す一神教の誕生」、同 [2004]『文明の環境史観』中央公論新社、267-72頁。

³⁵ 京都市埋蔵文化財研究所編 [2010]『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-11 史跡法観寺境内』京都市埋蔵文化財研究所、13頁。

³⁶ 『元亨釈書』卷第十八神仙五「法道」(国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース、<http://doi.org/10.20730/200004930>、531-533コマ、2019年6月29日閲覧)。同書は「一時乗_テ紫雲_ニ出_テ仙苑_ニ経_ヘ支那_ヲ過_テ百済_ニ入_テ我_カ日域_ニ」(中略)大化元年秋八月船師藤井載_テ官租_ヲ而過_テ道飛_ノ鉢_ヲ供_フとあるように藤井の件のあった大化元年八月より前に中国を経て来日したとするが、『峰相記』は「大化元年、比紫雲_ニ乗新羅百済_ヲ経過_ノ我朝_ニ飛来_シ」(中略)或時太宰府船頭藤井麻呂正税ト号_ノ供養_ヲ致_ス」(魚澄惣五郎 [1943]『斑鳩寺と峰相記』全国書房、<http://doi.org/10.11501/1042193>、60コマ・翻刻88コマ)のように中国には言及せず、大化元年のころに来朝したとする。後者は大化改新以後インド人が中国を経ずに来日したという事実の概略を伝えていると思われ、両者が矛盾する場合前者のほうが本来の情報に近いと思われる。

³⁷ 田岡香逸・宮川秀一・高井悌三郎 [1959]『播磨古法華山石仏と繁昌天神森石仏』甲陽史学会、2頁。

³⁸ 水野清一 [1961]「さまざまな造像」『世界考古学大系 第4巻 日本Ⅳ 歴史時代』平凡社、105頁、図90。

な展開を想定できるのではなかろうか。『信貴山縁起絵巻』で有名な、飛鉢を操る妙蓮が、『古本説話集』で信濃国の出身とされていることも、偶然ではないかもしれない。

旱魃の際に牛馬を殺して犠牲として捧げる風習が『日本書紀』（皇極天皇元年七月二五日条）に記されており、羊のいない当時の日本では犠牲の小羊が犠牲の牛と結びつけられて牛頭天王信仰を生み出したのではないかとされる³⁹。『日本書紀』神代上第八段一書第四には、スサノオが高天原から追放されて新羅国の曾戸茂梨に滞在したあと埴土の舟で出雲国に来たとあり、ソシモリは金城の意味で現在のソウルに通じ、新羅の首都慶州のことであるとされるが、牛頭とも音が似ているためスサノオと牛頭天王が同一視されたらしい。ソは蘇民将来のソでもあり「蘇」は牛乳から作られる非発酵チーズの一種で、蘇民は朝鮮半島から渡来した牛を飼う人々だとする解釈もある⁴⁰。高句麗から渡来した伊利之使主らとともにドヴァーラヴァティーから渡来した人々が祇園信仰の核を形成し、キリスト教の影響を強く受けているということによって、日本の牛頭天王信仰がインド・中国・朝鮮にはみられない独自のものであることをうまく説明できる。具体的には、以下のようなことを指摘できるだろう。



図7 祇園御本社粽と祇園守紋

出所：左 著者撮影（八坂神社＝祇園御本社授与の粽、自宅玄関先、2019年4月18日撮影）

右上 https://ja.wikipedia.org/wiki/成駒屋#/media/File:Narikoma-ya_Gion-mamori_inverted.png

右下 <https://twitter.com/hideki27fc5/status/712972109023064064>

いずれも、2019年4月12日閲覧。

多くの人が説くように祇園信仰の蘇民将来伝説は過越と似ている。過越は屠った小羊の血を家の入口につけた人々が神のもたらす災厄を避けることができるとするが、蘇民将来伝説は茅の輪をつけていれば牛頭天王＝スサノオ＝武塔神の災厄から免れるとし、祇園祭では八坂神社や各鉾が家の入口の上につける粽を授与する⁴¹。

³⁹ 羊はウシ科ヤギ亜科ヒツジ属、牛はウシ科ウシ亜科ウシ族ウシ属である。

⁴⁰ 川村湊[2007]『牛頭天王と蘇民将来伝説——消された異神たち』作品社、63－8頁。そうだとすると、「難波長柄豊前宮御宇天皇御世。大山上和葉使主福常。習取乳術始授此職自斯以降子孫相承。世居此任。至令不絶。」（『類聚三代格』巻第五、弘仁11（820）年2月27日付太政官符所引典葉寮解）「始令山背國點乳牛戸五十戸」（『続日本紀』和銅6（713）年5月25日）とあるように、和葉使主や山背国の乳戸が牛頭天王・蘇民将来伝説のもとになる信仰を受け入れ、発展させる基盤になったと思われる。具体的には「孝徳天皇時代に善那によって牛乳飲用が伝えられて以来、牛乳は飲用、薬餌、供物として利用され、当初天皇および三宮のみに供せられていたものが、上流貴族にも利用がひろがるようになっていった。」「しかし、現在のホルスタイン種のように多量に乳を出す乳牛ではないため、搾乳量が少なく、せいぜい貴族階級の需要を満たすのみで、一般にまでは普及しえなかった点が重要である」（斎藤瑠美子・勝田啓子[1988]「日本古代における乳製品『蘇』に関する文献的考察」『日本家政学会誌』Vol.39 No.4, https://www.jstage.jst.go.jp/article/jhej1987/39/4/39_4_349/_pdf-char/ja, 91頁）という指摘をふまえば、上流貴族に広まった牛乳の健康増進や薬としての効果が広く知られるようになり、牛乳を手でできない人々がその代わりに求めたものが牛頭天王の霊験で、その段階においてキリスト教に由来する天神が牛頭天王と呼ばれるようになったのではなかろうか。

⁴¹ 「蘇民将来子孫也」と書いた紙の上の部分で、ワラを束ねるために茅でぐるぐる蒔いているのでちまきと呼び、この部分が茅の輪である（「祇園祭の粽、茅の輪」『京都観光INDEX』<http://www.zekkeikana.com/kyoto/sajiki/gionmatsuri/chimakil1.html>, 2019年5月24日閲覧）。

血は茅と同音であり、チガヤについて「若い穂は雄しべも雌しべも赤く全体が赤く見えるので血茅、味が乳の甘味に似ているので乳茅などの諸説があるようだ。古名はチ（茅）で浅茅ヶ原などという⁴²⁾」という説明が示唆するように、茅は血を寓意しえる。また、祇園守の紋は牛頭天王祭文が斜めに直交する×（聖アンデレ十字型 図7右上）が標準だが、東京都荒川区南千住の素盞雄神社（図7右下）のようにギリシャ十字を含む例もある。「出雲の神庭荒神谷遺跡から1984年に358本の銅剣が発見された。その中の344本には×印が刻まれていた。……1996年には加茂岩倉遺跡から39個の埋納された銅鐸が発見された。その中の12個の銅鐸の吊手にも×印が刻まれていた。⁴³⁾」というように、出雲では弥生時代から×が重要な意味を有しており、祇園守りの×につながると思われる（同）が、それは聖アンデレ十字でもあり、45度回転させればギリシャ十字になることも、スサノオ＝牛頭天王とキリスト教の神の同一視・習合の前提となっただろう。祇園守は隠れキリシタンが十字架に見立てたが、このように、もともと十字架だったと思われる。

以上のように、7世紀後半にインドから東南アジアを経て日本にキリスト教がもたらされ、朝鮮半島・日本の土着信仰や仏教と習合しながら、波斯匿王ゆかりの本尊を伝える百済系の善光寺と祇園精舎を守護する天神を伝える高句麗系の祇園感神院・八坂神社で保存されるとともに、銀貨が作られて流通し、貨幣経済が発展した。

倭国弥留の優填王は牛頭檀越で五尺の仏像を作り、拘薩羅国の波斯匿王も紫磨金で同じく五尺の像を作ったことから、後者をふまえた善光寺本尊に対して祇園感神院の天神が牛頭天王と呼ばれるようになったことを説明でき、インド人夫妻の伝えたキリスト教が仏教に即して受け取られる際に重要な意味を持った『盂蘭盆経』は木蓮の母の救済、最初の仏像に関する『増一阿含経』は釈迦の母の救済に関する話であり、舞台はいずれも祇園精舎とされていることから、大津京や平安京にほど近い信仰の拠点が祇園と呼ばれるようになったことも説明できる。

草壁皇太子や軽皇子（文武天皇）を庇護する持統女帝は自らを太陽神たる皇祖神アマテラスに擬したが、キリスト教の聖母子イメージがそれを支え、当時の即位可能年齢に満たない数え年15歳の軽皇子への譲位もそれによって可能になったと思われる。

4. 東シリア教会キリスト教と怨霊・御霊信仰

天智天皇の男系子孫としては久し振りに即位した光仁の晩年、伊勢斎宮に美雲が現れたことによって781年に天応と改元されたのは、王朝交代を天命思想によって正当化する中国的な易姓革命の影響を受けていると思われるが、ちょうど辛酉年にあたり、ADの影響も読みとれるかもしれない。以下のように、光仁の後を継いだ桓武の治世においてもキリスト教の影響が顕著にみられた。

日本仏教特有の行事とされる春秋分七日間の彼岸会は、八〇六（大同元）年三月一七日に、崇道天皇（＝相良親王：桓武天皇の同父母弟、藤原種継暗殺に関与したとして廃太子、無実を訴えて絶食、淡路に配流される途中に憤死し、天皇号を追増される）のために春秋二仲月（2月と8月）の七日間諸国国分寺の僧に金剛般若経を読ませるよう、桓武が命じて崩じた（『日本後紀』同日条）ことにはじまるが、聖徳太子信仰にキリスト教が影響している⁴⁴⁾ので、小羊の血によって神の崇

⁴²⁾ <http://arakawasaitama.com/hanaindex/subchigaya.html>, 2019年5月24日閲覧。

⁴³⁾ 「東日本大震災 貞観地震と祇園祭（祇園御霊会）の起源－祇園守り」『ブログ 古代からの暗号』2011-05-20 18:42:34, <https://blog.goo.ne.jp/kotodama2009/e/7ad5ab55a0da2acda7dbaa2d217a4e02>。

⁴⁴⁾ (引用者による注) 久米邦武は聖徳太子誕生を巡る説話にキリスト伝の影響があるとしたが、受難は聖徳太子の嫡子・山背大兄王の最期に反映されている。「聖徳太子の嫡子・山背大兄王が、百姓を救うために自分（上宮王家）は犠牲になるとしているのは、万人救済のための受難に近く、そのような彼は「山羊かみしの小父」に喩えられている（小島ほか校注 [1998] 83頁——引用文中の注）。山羊はニホンカモシカのことだが、ウシ科やギ亜科である点で羊と同じであり、当時の日本で最も羊に近い種だろうから、「（雄の）小羊」は「山羊の小父」と訳し得たと思われる。」（平山朝治 [2009-5] 『平山朝治著作集 第5巻 天皇制を読み解く』中央経済社、291-2頁）。

りを避けたことを記念する過越祭が、ユダヤ教の第一月であるニサンの月の一四日夕方（夕方から一日のはじまるユダヤ暦では一五日のはじまり、春分後最初の満月の出るところ）から二一日夕方までの七日間、種なし（無発酵）パンを食べて祝われる（『出エジプト記』一二ノ一四～二〇）ことや、それに因むキリスト教の受難週（聖週間）に由来し、種なしパンはばたもちになったと推測できる。

過越祭のちょうど半年前と後、ユダヤ教第七月の一五日から七日間は仮庵祭であり、『民数記』第二八～九章によれば最大規模の供犠が捧げられる（旧約聖書翻訳委員会訳〔2004〕旧約聖書Ⅰ律法）岩波書店、補注9頁、「仮庵祭」の項を参照）。『ヨハネ福音書』第七章は、仮庵祭の半ばにイエスが神殿にのぼって教えはじめ、祭司長たちやファリサイ派の人々がイエスに殺意を抱いて逮捕しようとし、祭りの最終日にイエスが活ける水について語ったと述べ、仮庵祭での出来事を過越祭における受難や贖罪の前触れと位置付けているように、キリスト教においても仮庵祭は受難週に準じるものとされている。

この世の現実たる此岸から脱出し、理想境たる彼岸を目指すという宗教的意味付けが彼岸会にはあるが、過越祭と仮庵祭はいずれもエクソダス・出エジプトに因んだものとされており、エクソダスは出発点から、彼岸は目的地から、同じことを表現しているのも、日本の彼岸会が過越祭と仮庵祭の影響を受けていることの証になろう。（平山〔2015〕14頁）

冤罪で死に至った貴人を春分や秋分のころに祭るのはキリスト受難信仰に由来すると思われ、ばたもちの小豆の赤は魔除けの色とされるが、本来、犠牲の小羊の血を表していたとすれば、聖餐の葡萄酒とパンに通じる。崇道天皇を嚆矢として、無実の罪で殺された（自殺、配流や左遷と衰弱死も含む）と多くの人々にみなされた貴人が祟り、供養すると守護神になるという怨霊・御霊信仰が形成された。

貞観5年（863年）5月20日に神泉苑御霊会が行われ、「貞観十一年天下大疫之時、為 宝祚隆栄、人民安全、疫病消除、鎮護、卜部日良磨奉 勅、六月七日建六十六本之矛長二丈許、同十四日、率洛中男兒及郊外百姓而送 神興于神苑、泉以祭焉、是号祇園御霊会」と『祇園本縁雑実記』⁴⁵にあるように、祇園祭（祇園御霊会）は貞観11年（869年）5月26日の貞観地震直後に創始されて2019年に1150年を迎えた⁴⁶。粽や茅の輪によって祇園天神の災厄を免れるという信仰は旧約の過越祭を起源とし、怨霊・御霊信仰は過越祭をふまえたキリスト受難の影響を受けたものであり、両者が一体化したものが祇園祭ということになる。

これらのことをふまえると、「平和の町」を意味するエルサレムを漢字に直したものが平安京である可能性も否定できない⁴⁷。「又子來之民、謳歌之輩、異口同辭、號曰平安京」（『日本後紀』卷三、『日本紀略』逸文、延暦13（794）年11月8日）と遷都した年にあるように、新しい都の呼び名や、のちに時代を表すようにもなる「平安」という呼称は朝廷が定めたものではなく、民間で形成され広まっていることは、冤罪死した貴人を恐れ祭る怨霊・御霊信仰が民間で広まったことにもつながる。それらは、渡唐官人・僧侶のようなエリートによって中国のキリスト教ないしマニ教が伝えられたのではなく、インド人キリスト教徒の夫妻、とりわけ日本に終生留まって銀貨製作などを指導したと思われる舎衛婦人を中心に、聖トマスのインド伝道にはじまるインドのキリスト教が、舎衛婦人という漢字名が示唆するように仏教と明確に区別されないまま民間に広まったこととも符合している。

⁴⁵ 八坂神社文書編纂委員会編〔2016〕『新編八坂神社記録』臨川書店、66頁。『祇園本縁雑実記』は寛文年間に編纂されたと考えられるものであり、従来、八坂神社編〔1906〕『八坂誌 乾』八坂神社、121頁（<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/904398/84>、2019年6月26日閲覧）に『祇園社本縁録』として引用されていた（河内将芳〔2016〕『2015 年度 実績報告書 日本中世・近世寺社古記録成立に関する基礎的研究』<https://kaken.nii.ac.jp/ja/report/KAKENHI-PROJECT-25370811/253708112015jisseki/>、2019年6月27日閲覧）。

⁴⁶ 5月26日の貞観地震が同年6月7日の矛立て～14日の神興渡御を帰結したとする説は、注43で挙げたブログや、尾池和夫〔2015〕「祇園祭と貞観地震」『京都の地球科学（二五五）』2015年07月号、<http://catfish-kazu.la.coocan.jp/201507hm.html>にある。

⁴⁷ エルサレムの翻訳が平安京であるという説は学術的には荒唐無稽な日猶同祖論において唱えられてきたものと同じだが、日猶同祖の仮定は不要である。

このように、7世紀後半の日本に伝来したインドのキリスト教は、中国文明由来の元号や仏教信仰のなかに混じり込みながら、それらにはもともとなかった特質を帯びて大宝建元以降の元号や神武紀元、鑄貨、善光寺信仰、祇園信仰、秘仏信仰、春秋彼岸会、怨霊・御霊信仰、日本の祭りの原型となった祇園御霊会などを生み出したのであり、東アジアのみならず世界のなかでも特異な日本文明の個性の多くはインド・東南アジアから7世紀後半に伝来したキリスト教に由来している。それらは、唐に留学したエリート貴族・僧侶からみればいかがわしいもので、善光寺は難波から信濃に移された⁴⁸。

5. 「つぎつぎになりゆくいきほひ」と進化論

丸山眞男は記紀にみられる神話と歴史の連続性を「つぎつぎになりゆくいきほひ」と特徴付けてそれ以降の日本人の歴史意識の根底になったとし⁴⁹、レヴィ＝ストロースは「私たち西洋人にとっては、一つの深淵が、神話と歴史を隔てています。反対に、私が最も心を惹かれる日本の魅力の一つは、神話と歴史相互のあいだに、密接なつながりがあることです。」「この連続性は、日本を訪れた初期のヨーロッパ人たちに、衝撃を与えずにはおきませんでした。すでに十七世紀に、ケンペルは日本の歴史を三つの時代に分けています。伝説の時代〔『日本誌』では「天神の時代」〕、不確実の時代〔「人神の時代」〕、真実の時代〔「人皇の時代」〕です。ですからケンペルは、そこに神話を含めたわけです。⁵⁰」と述べている。私見では、ユダヤ・キリスト教的歴史意識とギリシャ・ローマ的な神話意識とが断絶したまま西洋では保存され、両者が対立的にとらえられるのに対して、日本では8世紀に編纂された記紀において神話の歴史化を主としながら両者の連続性が形作られた。

西洋においては、歴史から超越した神話はプラトンのイデア論へと洗練され、神話と断絶した歴史は天地創造から終末に至る、はじめと終わりによって区切られた線分としての歴史となり、前者はプラトン『国家論』の哲人政治、後者は神の意思を伝える預言者を生み出し、ホッブズの社会契約論や共産党一党独裁支配による計画経済のような設計主義的合理主義の源流となったのに対し、天地開闢以降の歴史を超越的設計者・主宰者なしに不可逆的に変化してゆく「つぎつぎになりゆくいきほひ」によってとらえる日本の歴史意識は自生的秩序の進化を叙述するのに適している⁵¹。

丸山は「つぎつぎになりゆくいきほひ」がダーウィンの進化の論理を含意していることを『古事記』によって示している。

よもつひらさか
黄泉比良坂でのイザナミの呪言とイザナキの応答のあとで、『記』は、「是以一日必千人死、一日必千五百人生也」と付記しているが、これは、生死の紀元説話であるとともに、生者の数が死者の数を上まわるという「現実」の理由の説明でもある。生と死との二元的原理（または神対悪魔）の闘争を通じて生が勝利するのではなくて、一方でいくら死んでも他方で生まれる者が多い

⁴⁸ 唐の仏教を規準に朝鮮半島由来の仏教・道教やそれらと混淆していたキリスト教を批判・排除して善光寺を難波から信濃に追いやったのは道慈であると思われるが、長屋王の変のあと、彼は排除したキリスト教的特徴を裏口からこっそり入れて聖徳太子信仰・御霊信仰の形成にもかかわった（平山〔2009-5〕268、305-15頁）。

⁴⁹ 丸山眞男〔1972〕「歴史意識の『古層』」『丸山眞男集 第10巻 1972-1978』岩波書店を参照、引用は45頁。

⁵⁰ レヴィ＝ストロース、川田順造訳〔2014〕『月の裏側——日本文化への視角』中央公論新社、18、19頁。「真実の時代」の「真実」とは歴史的事実といった意味合いだが、実証的な意味での事実だけが含まれるわけではなく、『日本書紀』編纂時において歴史的事実と信じられていたものが年代記的に叙述されるようになって以降の時代であり、神武即位前紀以降にあたる。

⁵¹ F.A. ハイエク、一谷藤一郎訳〔1954〕『隷従への道——全体主義と自由』東京創元社（同、西山千明訳〔1992〕『ハイエク全集 第1期別巻 隷属への道』春秋社）、同、佐藤茂行訳〔1979〕『科学による反革命——理性の濫用』木鐸社（同、渡辺幹雄訳〔2011〕『ハイエク全集 第2期第3巻 科学による反革命』春秋社）、同、矢島鈞次・水吉俊彦訳〔1986〕『ハイエク全集 第1期第8巻 法と立法と自由（1）ルールと秩序』春秋社、同、篠塚慎吾訳〔1987〕『ハイエク全集 第1期第9巻 法と立法と自由（2）社会正義の幻想』春秋社、同、渡部茂訳〔1988〕『ハイエク全集 第1期第10巻 法と立法と自由（3）自由人の政治的秩序』春秋社を参照。

ので、結局は増殖して(＝成^なり)ゆく、という自然増殖のオプティミズムの発想であり、それが産^{むす}霊の発動によるアシカビの生長繁殖のイメージで裏打ちされている。(丸山 [1972] 19頁注)

丸山が「つぎつぎになりゆくいきほひ」を「自然増殖のオプティミズムの発想」とみているのは、一面的ではなかろうか。持統天皇が近江に行幸した際に作られ、女帝に奉呈されたと解釈されている⁵²、不可逆的な時間を日本ではじめて表現したとされる柿本人麻呂の「近江荒都の歌」においては永遠回帰する神話的時間と眼前の廃墟が示す不可逆的時間との対立がみられた⁵³。この歌は草壁皇太子を失った持統が壬申の乱で滅んだ近江方を祀る挽歌の枠組によっており⁵⁴、天智天皇の血は自分を通して草壁皇太子から軽皇子にも伝えられていることによりながら天智の血を受け継いでいない他の天武天皇の皇子たちに対する軽皇子の優位を主張し、軽皇子の登位を実現させようとしたものであった⁵⁵。

また、文武天皇の唯一の直系男子首皇子の成長プロセスは、乳幼児死亡率が高かった当時、彼の死やそれに伴う文武直系皇統の断絶の危機と背中合わせだったのであり、皇統断絶の危機が神武以降第13代成務まで皇位の父子直系継承が続くという皇統譜を生み出した⁵⁶。即位せずに薨去した草壁皇太子から文武・聖武へと繋がる直系系譜は、天武天皇の皇子が少なからず現存するなかで正統性を主張しなければならず、天智の定めた不改常典⁵⁷は、それが定めた直系継承を破って即位した天武の正統性を否定しつつ、天智—持統(女帝)—草壁皇太子—文武—首皇子および天智—元明(女帝)—文武—首皇子と、天智の娘を含む直系で二重に天智の血を受け継いだ文武と聖武の皇位継承権を正統化した。持統をモデルとするアマテラスという女性太陽神にはじまる皇統譜における「つぎつぎになりゆくいきほひ」は、乳幼児死亡率の高さと有力な天武の男系直系皇子たちの存在という過酷な環境に打ち克つために要請された思想であり、天智→持統・元明直系皇統断絶の危機を背景としている。

7世紀末の持統朝において詠まれた「近江荒都の歌」にみられる永遠回帰する神話的時間と不可逆的な歴史的時間との対立を止揚したものが、つぎつぎになりゆくいきほひによる記紀の神話と歴史の

⁵² 北山茂夫 [1958] 『萬葉の創造的精神』新潮社、36－7頁。

⁵³ 『万葉集』29－31、平野仁啓 [1976] 『続 古代日本人の精神構造』未来社、318－34頁、真木 [1981] 101－7頁。

⁵⁴ 山本健吉 [1975] 『柿本人麻呂 新装版』講談社、71頁、50頁。

⁵⁵ 真木 [1981] 102－4頁。そこでは、女帝は男系継承の中継ぎにすぎないとする従来の通説に従って、壬申の乱で天智から大友皇子(弘文)への皇統を否定した天武の皇統と天智の女系子孫である軽皇子とを、天智と天武の父である舒明まで遡って統合することを持統は目指したとされているが、それならば神話において皇祖神は舒明に対応する男神となったはずであり、自らを皇祖神に擬することによって自らの子孫に皇位継承資格を限定して天武系の皇子たちから正統性を奪うことこそが持統の狙いだった(平山 [2009－5] 6－15、200－3頁)。さらに、持統が皇祖太陽神を女神とする以前は、男性太陽神の娘とスサノオが結婚して皇祖神になるという婿入り神話があって、継体の即位を正当化していたと思われる(平山 [2012] 「二章 アマテラスと天岩戸神話のなりたち」を参照)。

⁵⁶ 成務は、即位せずに薨去したヤマトタケルの弟で、成務の次にはヤマトタケルの子・仲哀が即位する。仲哀の子とされる応神はその出生日から逆算して仲哀の死後に神功皇后は妊娠したので仲哀の子ではないとする説が新井白石などによって唱えられてきた。さらに、神功皇后には新羅王室の血が入っており、新羅王室は女系継承を認めており、応神の5世孫継体も武烈の姉に婿入りしているように、仲哀以降の系譜は女系継承を認める新羅王室の継承ルールの影響や皇統の男系としての断絶・交代を示唆していると解釈できる。首皇子は即位して聖武天皇になると娘を皇太子にし、さらに孝謙天皇として即位させ、もし孝謙に男子が産まれれば女系継承をさせるつもりだったと思われ、それを正統化するような皇統譜が現在では失われている『日本書紀』系図一卷のなかに伝えられていたと推測することもでき、女系継承を認めるような新羅王室と同様の規範意識に基づく系譜は継体から欽明への継承のころに形成され(平山朝治 [2011] 「記紀皇統譜の女系原理——天日槍(＝天彦火)王家の復元」『筑波大学経済学論集』第63号、<http://doi.org/10.15068/00137842>)、文武から聖武への父子直系継承を強く望む意識によって、女帝に相当するアマテラスを皇祖とすることで女系継承を前提としながら父子直系を重視するような神統・皇統譜が仲哀よりも前に欠史十代として架上されたと思われる。

⁵⁷ 不改常典については、村井康彦 [1989] 王権の継受——不改常典をめぐる『日本研究』国際日本文化研究センター、第1集、平山 [2009－5] 「I－1章－1 女帝子孫の相承とアマテラス神話」を参照。

連続的叙述であり、適者生存と不適者滅亡と近江朝廷や蘇我氏のような滅亡者の包摂⁵⁸は三位一体として解釈しなければならない。末法思想は後二者に重点を置いたものであり、仏の教えが伝えられて行くうちに、形だけ伝わっている像法の世の次に跡形もなく滅びる末法の世が訪れるという危機感のなかで、インドでは大乘仏教が生まれ、日本では鎌倉新仏教が生まれるという風に、このままでは過酷な現実によって衰滅するという危機意識をバネに適応力を増す進化が生じた。

生者が死者を上まわるため結果的に増殖してゆく際に、適者生存の自然選択が働き、生物の種は不可逆的に進化し、枝分かれして多様化してゆくというダーウィンのロジックが、日本神話では、つぎつぎになりゆくなかで新たな神々が次々と登場し、神々の数が増加するという風に表現されていると解釈することができ、日本神話＝歴史のロジックに科学の装いを与えたものがダーウィンの進化論であるということすら可能だろう。丸山は「この古層は、進歩とではなく、生物学をモデルとした無限の適応過程としての——しかも個体の目的意識的行動の産物ではない——進化（evolution）の表象とは、奇妙にも相性が合う」（丸山 [1972] 54頁）と指摘している。彼はまた、「『いきほひ』のあるものに対する賛辞が『徳』である」（同、32頁）という「徳」のとらえかたを日本独特としているが、自然選択によって生存するものが適者であるという「適者」のとらえ方と非常に近い。

丸山は「生成のエネルギー自体が原初点になっている（はじめに『いきほひ』ありき!）」（丸山 [1972] 38頁）と述べて、「つぎつぎになりゆくいきほひ」の哲学的・宗教的な可能性を示唆している。進化論の自然選択・適者生存は、西洋においては無神論的とされることが多いのに対して、日本の伝統的な宗教性と親和的であることは、縄文美を発見した岡本太郎が1970年の大阪万博のシンボルとして制作した太陽の塔のなかに進化系統樹である生命の樹を置き、上方に向かって伸びることばかり考える西洋起源の進歩主義と対比して、系統樹のおおもとである生命の根源に立ち戻って生命の一体性を回復すべきことを表現したのにも現れている。『生誕100年 岡本太郎展』（東京近代美術館、2011年）で放映された記録映像で、彼は生命の樹について人間は思い上がりを持って単細胞生物にまで降りなければならぬなどと語っていた。

丸山が「古層」としたものを岡本は縄文以来の生命観・宗教観として表現し、終末論史観や進歩史観に對置したと評することができるだろう。岡本の生命の樹に表現されている日本的な生命観・歴史観は、縄文以来の自然観とインドから伝来したキリスト教に由来する不可逆的な歴史の観念とが融合することによって生まれ、記紀における神話と歴史の連続的な扱いとして定式化されたと言えることができるだろう。

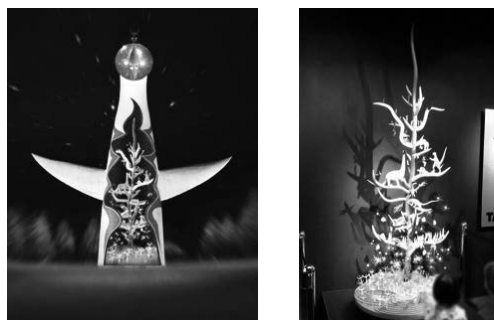


図8 太陽の塔と生命の樹

出所 左：<http://www.fashionsnap.com/news/2011-12-13/osaka-banpaku-taro/> 2011年12月13日 14:26 JST
右：著者撮影（岡本太郎記念館所蔵 生命の樹 1/20縮小模型）

⁵⁸ 持統と元明は母が姉妹で、母方祖父が蘇我石川麻呂であるから、乙巳の変で中大兄皇子側に与したが4年後の649年（大化5年）に謀叛の嫌疑で自害した石川麻呂の血をも文武と聖武は濃厚に受け継いでいたことになる。当時はまだ怨霊・御霊信仰は形成されていなかったが、蘇我氏と近江朝廷という現世では滅亡した勢力の血が女系によって文武と聖武に流れ込んでいることが、他の諸皇子たちに対する彼らの強みになっていたと言えるかもしれない。また、持統と元明が文武に宮子、聖武に光明子と藤原不比等の娘を配したのは、自分たちの母方蘇我氏を継ぐ外戚氏として藤原氏に期待したからであろう。

6. 天皇をよりどころとする辛酉革命

キリスト教の終末論は古代日本に伝わりと跡形もなく消えたのだろうか？ キリスト紀元元年が辛酉なのは偶然ではないとすればそうではなく、60年周期の辛酉革命改元、甲子革命改元に反映されているとみることができる。また、江戸時代に、1650年（慶安3年）、1705年（宝永2年）、1771年（明和8年）、1830年（文政13年・天保元年）と約60年周期に起こった大規模なおかげまいり⁵⁹も周期化された終末現象であろう。前者は知識層、後者は一般庶民が主たる担い手だが、60年は当時としては普通に長生きした人の誕生から死までの標準的な時間と考えることができる⁶⁰。

革命と訳される revolution の動詞形 revolve は「回転する、ぐるぐる回る、循環する、周期的に起こる、(…を) 中心題目とする⁶¹」を意味し、革命は西洋においても周期的に起こるとみなさることもあった。

辛酉革命と甲子革命に因む改元は、擬似革命によって皇統の連続性を保障するものと意味付けられ、日本には易姓革命が根付かなかったことと関連付けられることもあるが、辛酉革命・甲子革命改元慣行のきっかけとなった三善清行の菅原道真に対する右大臣辞職勧告⁶²は菅原道真ら寵臣を重用する宇多上皇の影響力を排除して醍醐天皇を中心とする政権を樹立しようという政治変革を辛酉革命によって推進し、「革命勘文」では道真左遷によってそれを実現した昌泰の変を事後的に正当化する革命改元を提言したのであり⁶³、天皇をよりどころとする政治改革の旗印として革命・革命改元慣行は始まり、これ以降天皇は日本における革命の旗印となった。

清行は「革命勘文」で天智即位を称政開始と混同して661辛酉年とし、1320年周期を一部として重視することによって神武を太祖、天智を中宗とし⁶⁴、蘇我蝦夷入鹿父子を討ち、蘇我氏の専横を排して皇室中心の政治を実現した乙巳の変を理想化して昌泰の変を正統化したのであり、それに倣って武家の台頭後も辛酉革命・甲子革命思想は倒幕や藩閥政権打倒などによる天皇を中心とする政治体制の回復と結びついてきた。鎌倉幕府末期、後醍醐天皇は辛酉年である1321年に元亨、甲子年である1334年に正中と改元した。また、幕末期の孝明天皇は辛酉年である1861年に文久、甲子年である1864年に元治と改元しており、革命・革命改元のころ倒幕の気運が高まり、天皇を中心に政局が推移したことからして、日本史上典型的な革命は倒幕と天皇親政回復としての革命であり、辛酉年とその3年後の甲子年に行われた2度の改元は天皇の権威を高め、倒幕＝革命を自己実現するようなものであったと言える。ちなみに、一世一元の制のため革命革命改元はなかったとはいえ、1921年（辛酉・大正10年）や1924年（甲子・大正13年）のころは普通選挙に向けて一君万民を理念とする大正デモクラシー運動が高揚し、辛酉年には原敬首相が暗殺され、甲子年の翌年である1925年（大正14年）に普通選挙法が成立した。

日本に定着した革命観念も「つぎつぎになりゆくいきほひ」に従うものではあるが、神武創業や天智中興という理想を伴っている。他方、武家政権の成立も「つぎつぎになりゆくいきほひ」によって正統化される（丸山〔1972〕41－5頁）とはいえ、辛酉革命の思想からみれば天皇中心の理想の政治体制からの墮落という、末法思想的な下降局面であり、やがて革命を経て上昇局面に転換するという風に、めざすべき理想の観念を伴いつつ循環する長期波動も見出せるものとして、日本の伝統的歴史意識の全体像をとらえる必要があるだろう。

⁵⁹ 山口千代己〔1992〕「多くの民衆伊勢へ『おかげまいり』」『歴史の情報蔵』<http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/rekishi/kenshi/asp/arekore/detail.asp?record=85>、2019年6月21日閲覧。

⁶⁰ 当時としては恵まれた生活・医療環境を享受していた徳川将軍15人の平均寿命は51.4歳であり、60歳以上生きた将軍は6人である（「徳川将軍の平均寿命は何歳？」『歴史ハック』<https://rekishi-hack.com/tokugawa265/>、2019年5月12日閲覧）。

⁶¹ <https://ejje.weblio.jp/content/revolve>、2019年5月12日閲覧。

⁶² 「右大臣道真、重ねて右近衛大将ヲ辞ス、明日文章博士三善清行、書ヲ道真に送りテ、辞職ヲ勧ム」（『大日本史料 第一編之二』昌泰3年10月11日条）、「文章博士三善清行、明年辛酉革命ノ議ヲ上ル」（同、同年11月21日条）。

⁶³ 平山〔2005〕「Ⅲ 革年改元の起源」、とくに注13を参照。

⁶⁴ 三善清行「革命勘文」（『大日本史料 第一編之二』延喜元年2月22日条、山岸徳平ほか校注〔1979〕『日本思想大系8 古代政治社会思想』岩波書店）。

おわりに

戦後日本に定着した象徴天皇制と天皇をよりどころとする旧弊打破という伝統的な革命思想とは両立し難い。大正デモクラシーが求めた一君万民の理想を安定的な制度として実現したのが象徴天皇制のもとでの戦後民主主義だと言うこともできるだろう。他方、1970年代初頭には戦後高度成長がピークを迎え、新左翼的な学生運動が連合赤軍による浅間山荘・リンチ殺人事件に至って社会主義的終末を求める思想への若い世代の支持が失われて西洋起源の進歩史観は説得力を失った。このように、日本の主な歴史意識のなかでは丸山が1972年に指摘した「つぎつぎになりゆくいきほひ」のみが、ちょうどそのころ淘汰を免れて自然選択されたと思われる。自生的秩序の進化という終わりの観念を欠いた歴史意識は、多様な諸文明の共存や、持続可能性という、終末論に代わる社会の現実的な目標とも整合的であろう。

そのころから、「つぎつぎになりゆくいきほひ」を体現して登場したのが、『スター誕生!』などの視聴者参加型オーディションでデビューを勝ち取り、阿久悠、松本隆、秋元康らの詞を歌ってブレイクしたアイドルである。阿久悠はアイドルへの作詞について「十四歳、十五歳から始まり、彼女たちの成長や、社会的印象の変化などを見つめながら、彼女たちの内部に起こるであろう問題を取り込むことが、不可欠になっていった⁶⁵⁾」と述べ、岩崎宏美のキャッチフレーズについて、「日常の中の夢を売る少女とか、時代が要求したアイドルといった立場を説明するものより、『天まで響け!』この一言で、歌手としての使命の大きさと、明るくひろがった未来を感じさせた⁶⁶⁾」と岩崎のデビュー 30周年に寄せたメッセージで書いたように、アイドルは成長プロセスを見せ、日常の中の夢を売って未来への希望を人々に与えることで、時代が要求する使命を果たしてきた。

アイドルの源流は数え年15歳で即位した文武天皇や、即位を期待された首皇子の成長プロセスで、イメージ(像)としては、聖武天皇の皇女でのちに孝謙天皇として即位した阿倍内親王の数え年16歳のときの姿を写しているとする説⁶⁷⁾もある、天平6年(734年)に作られた興福寺阿修羅像まで遡る⁶⁸⁾。目的=終末を欠いた不可逆的連続的時間としての歴史意識は聖武天皇の誕生と成長にはじまり、今日のアイドルにまで受け継がれてきた。

典型的な日本のアイドルは、1970年代はじめにおける高度成長の終焉や新左翼革命運動の挫折とともにあらわれ、AKB48⁶⁹⁾や乃木坂46に代表される21世紀の多人数グループ・アイドルはリーマンショックや東日本大震災とともに大ブレイクした。

流行していた当時は「アイドル」とは呼ばれなかったがアイドルとみなしえる存在としては、経済成長の長期波動に即してみると、幕末維新にはじまる第1長波に対応するものとして娘義太夫、1916年にはじまる第2長波に対応するものとして劇中歌を唄う松井須磨子・浅草オペラ・少女歌劇、1930年ころからの第2長波上昇局面なかばから1955年ころからの第3長波に対応するものとしてアンコものを中心に唄うソロの少女歌手を挙げることができ、長波の上昇局面において新たなものが出現し、下降局面において大ブレイクする傾向が見られるが、1940年～1954年ころの第2長波下降局面は戦争や戦後復興という攪乱要因が大きいのでアイドル的現象を読みとることは困難であり、1955年以降については上昇局面に島倉千代子や都はるみがあらわれ、1970年以降の下降局面に森昌子ら視聴者参加

⁶⁵⁾ 阿久悠 [2007] 『夢を食った男たち——「スター誕生」と歌謡曲黄金の70年代』文春文庫(初出は1992-3年) 175-6頁。

⁶⁶⁾ 阿久悠 [2005] 『「天まで響け」から永遠に』『HIROMI IWASAKI 30 TH ANNIVERSARY BOX』テイチクエンタテインメント。

⁶⁷⁾ 鈴木八朗 [2001] 「阿修羅の美とモデル」、興福寺監修『阿修羅を究める』小学館、山口博 [2006] 『平安貴族のシルクロード』角川選書、114頁を参照。

⁶⁸⁾ 平山朝治 [2016] 「ポストモダン社会経済における、アイドルの芸術性と宗教性」『筑波大学経済学論集』第68号、<http://doi.org/10.15068/00137027>、4頁、同 [2018] 「アイドル150年——アイドル・ブームと長期波動」『筑波大学経済学論集』第70号、<http://doi.org/10.15068/00150843>、5-6頁。

⁶⁹⁾ 平山朝治 [2019] 「AKB レインボー経済」『筑波大学経済学論集』第71号、<http://doi.org/10.15068/00154855>。

型オーディション出身者を中心とする狭義のアイドルが出現し、2005年以降の第4長波始動に堀北真希やAKB48らメジャーなアキバ系アイドルが登場したとまとめることができる（平山 [2018]）。

長期経済変動の上昇局面は進歩主義が説得力を持つのに対してピークから下降局面にかけてそれが魅力を失ってアイドル的存在の人気の高まるという傾向を見出すことができる。2005年以降の第4長波上昇局面は前途不透明な未来に向かって手探りで進むという性格が強いとすれば、進歩史観が優勢だった従来の長波では上昇局面がピークに達して以降次々と大ブレイクしやすかったアイドルが始動直後から次々と大ブレイクしたと言えるかもしれない。

1970年代はじめに西洋的・終末論的な歴史意識の近現代ヴァージョンである進歩主義史観が行き詰まるとともに、日本では個々人の成長プロセスを重視する歴史意識が表面に出て影響力を発揮し、アイドルの人気の高まった。西洋的な歴史意識における終末や目標が説得力を失うとともに、それら抜きで未来への希望をもたらしてきた記紀以来の「つぎつぎになりゆくいきほひ」が顕在化し、成長プロセスを重視するアイドルがそれを担って活躍する。このような観点に立つと、同じキリスト教に紀元を有する西洋と日本の歴史意識には重大な相違があることも理解できるのではなかろうか。